現実変化

四谷イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
現実変化

【Ｎコード】
Ｎ２８１９Ｉ

【作者名】
四谷イツキ

【あらすじ】
彼女が父親を殺した？
男が彼女をかくまうお話。
果たして、真実は一体・・・？

1（前書き）

この話は６年前に執筆したもの。
拙文ですが、当時は精一杯頑張ってました。
加筆修正はなし！
乱文はご愛嬌でお願いします。

1

彼女は何も言わない。
僕の部屋のベッドに、瞳の色を変えて座っているばかりである。
いつもより、小さく見えてしまうのはどうしてだろうか。

「光里・・・大丈夫だよ」
僕は彼女に向かって言った。
しかし、　光里が声に反応することはなく、
変わらず瞳に何も写さないままそこにいた。
僕の狭い部屋に、彼女の放つ異様な雰囲気が分散される。
窓の外には、今にも泣き出しそうな空が僕を見下ろしていた。

――――――泣きたいのは、僕の方だ。

光里が僕の部屋に転がり込んできたのは、今から二日前。
空は今日とは裏腹に、気持ち悪いくらい晴れ渡っていた。
こんな色を自然が作り出せるのか、と疑ってしまうほど。

「瑞哉・・・瑞哉、どうしよう」
外の冷たい空気が、玄関のドアから家の中へと舞い込む。
慌てる光里を尻目に、僕はドアを閉めるよう勧めた。
彼女は震える手でそれを閉めると、
そのままドアに寄りかかる形で座り込んでしまった。

「おい、光里！一体どうしたんだ？」
尋常ではない光里の様子に、僕は心底不安になった。
僕が光里の視線に合わせるようにしてしゃがみ込んだ、その時。
彼女は涙をその瞳に携えて僕に抱きついた。
「瑞哉、私・・・」
しゃくりあげながら、彼女は言葉を続ける。
「私・・・」
徐々に僕の心拍数も早くなる。
光里は、何を・・・？
じれったいと感じながらも、
僕の心臓は光里の言葉を聞きたくないようにも思えた。

「私、父さん・・・殺しちゃった」

――――ワタシ

――――トウサンヲ

――――コロシマシタ。

2

正直、僕はあまり光里の言葉に驚かなかった。
いつかやる、そんな考えが頭の隅にでもあったもしれない。

石油ストーブの匂いと温かい風で満たされた部屋に彼女を通すと、
ベッドに座らせた。
まだ涙が止まらないらしく、鼻をすする間隔が短くなっていった。
「それで・・・お父さんは？」
窓から陽が差し込む。
それに照らされた光里の鼻は真っ赤になっている。
「家に、いる」
とぎれとぎれの言葉は、なぜか彼女を愛しいと思わせた。
そう思う一方で、家にいるという表現はおかしいと感じた。
彼はもう既にこの世にいないのだから。
しかし、ここでとやかく言う問題ではないことは分かりきっている。

もう家には戻りたくない。
彼女は付け加えた。
当たり前だろう。
家には自分で殺した、自分の父親が息もせずに彼女の帰りを待っているのだ。
「ここにいていいから」
僕は少々戸惑った。
これから、どうすればいいのか。
光里の父をそのまま家に放置しておいて良いのもなのか・・・。
「ありがとう」
彼女は涙と笑顔を混雑させた顔を僕に向けて言った。
その表情を見た僕はどうすればいいのだろう。

父を殺してしまったショックと罪悪感、そして父から解放された喜び・・・。
思えば、彼女と出会って一年の間で、度々泣き顔を見ていたような気がする。

光里は、僕と出会う二年前に母親を亡くしている。
それまでは家族三人でごく一般的な生活を営んでいた。
しかし、母の死がその生活を一転させたのである。

母が死に、父はそのショック・喪失感のせいか働きに出なくなった。
だが、生きていくためにも誰も働かないわけにはいかず、
情けない父親の変わりに光里が朝から晩まで働きに出ていた。
所得が減り、それに従って住居も質が落ちる。
加えて父は酒に溺れるようになり、古びた木造のアパートはいつも酒の匂いで満ちていた。

「ただいま」
光里が玄関から部屋の奥へと声を掛ける。
奥、といってもすぐに限界のある広さでの奥である。
返事が返ってくるはずもなく、汚れた空気が蔓延した部屋に足を踏み入れる。
電気はついておらず、そこに父がいるのかも疑わしかった。
「父さん？」
居間に着くと、真っ先に電気のスイッチを付けた。
暗かった部屋に、希望のごとく光が広がる。
だが、光里にとって、それは希望とは全く逆のものであった。

明かりをつけたせいで明確になる現実。
床には酒の瓶と缶が当たり一面に散乱し、その中に埋もれるようにして父が丸まっていた。
暗いほうが幸せだと、何回感じただろうか。
思わず光里の口からため息が漏れる。
その彼女の表情には、負の感情しか込められていない。
時は既に八時を回り、夕飯の支度をしなければいけなかった。
光里は荷物を壁に立てかけるようにして置くと、台所へと歩み出した。

悲劇が起こったのはその時だった。

光里は床に転がっている瓶を見事に踏んでしまったのだ。
前につんのめるようにして倒れるが、何とか前方にあるテーブルにしがみつく。
だが、そう簡単に幸いへ転じてはくれなかった。
しがみついた時には確かにあったはずの、まだ中身の入った瓶が、ない。
気付いた瞬間、テーブルの向こう側に落下していく瓶の口が見えた。
「あ・・・」
声と表情はそれに反応したものの、
体はまだ転んだ後始末をしているせいで、瓶をつかむことが出来なかった。
いや、動けたとしても光里の反射神経では無理だったかもしれない。
彼女の頭の中で瞬時に思考が飛び交う。
確か、父はさっきこのテーブルの下で丸まっていた・・・
考えがまとまった直後、瓶は鈍い音を立てて乳の上へと降って行った。

「父さ・・・」
声が思うように出ない。
か細い光里の声は、父の耳に届くはずがなかった。
テーブルにしがみつくような体勢の光里の瞳に、酒を頭から浴びた父の姿が映る。
「ごめんなさい・・・父さん」
口だけが呪文のように言葉を吐いた。
目は父を捉え、見開き、顔は凍りついたまま動かなかった。
原因は、父のその狂気に満ちた表情にある。

繰り返し吐かれる言葉など、まるで届いていないかのように父は光里を見下ろしていた。
いつもは小さく、頼りない男にしか見えないのに、
今ばかりは何故か巨大で恐ろしい怪物のように見えてしまう。
「ごめんなざい・・・」
そう呟きながら、光里はテーブルから離れて後退した。
自分でも何を言っているのか分かっていない。
ただ無意識の内に言葉が口をついた。
背中を冷や汗が伝う。
なぜか緊張した自分がいた。

今までに一度も見たことのない父の表情。
雰囲気から伝わってくる尋常ではない怒り。
歩み寄ってくる父をなだめようと、光里が手を差し伸べた。
「父さん・・・落ち着いて」
一瞬だけ見えた彼の瞳の奥には、何もない空虚な空間があった。
何も写さない黒色が息を潜めて獲物を待っているだけだった。

光里が次に父の顔を見たのは、数時間後のことだった。

床に横たわった自分がどうして動けないのか、すぐには分からなかった。
光里を見下ろす父の目。
そこには『母の死』も、それに伴う『哀しみ』もない。
ただ理性に欠けた人間がいるだけだった。

3

光里が初めて僕に、父から受けた暴力のことを話してくれたとき、
彼女の表情は恐ろしいものを見るかのように怯えていた。
きっと『このことを話した』という事実が父に知られたら・・・と
心配していたのだろう。
全てを話し終えると、安心したのか、
それとも今まで感じた痛みが半減したのか、光里は泣き出した。
それを見て、何故か僕も泣きたくなる。
こんなに小さな彼女が、
大きな哀しみと痛みを背負って生きていたかと思うと切なくなった。

最初に父親が光里に暴力を振るって以来、毎日のようにそれは行われているという。
それも他人に見られないような腹部などと中心にして・・・。
確かに光里の腹部や普段目に付かない場所には痣や、痛々しい傷が目立つ。
僕はその現場を想像しようとして、すぐに止めた。
目の前で泣いている光里と、
父に痛めつけられている光里が全く別人のように感じられたからだ。
弱い部分と、強い部分を見せられてしまった僕の中に戸惑いがある。
「僕の家にいればいいよ」
彼女の保身を思い、僕は強くそれを希望した。
いつか、いつか大変なことになる。
しかし、彼女が言うことはいつも同じだった。
「父さんが、可哀相だから」
思わず彼女の心臓を疑ってしまう。

『家族愛』というものは、これほどまでに強いものなのだろうか。
僕が彼女の立場だったら、とっくに家を飛び出ているはずだ。

しかし、光里が涙を流さずに、嬉しそうに父親のことを話すこともあった。
「自堕落な生活を送っている父にも、毎日欠かさないことがあるのよ」
光里はキラキラした瞳で言う。
光里の父は、毎朝玄関に立ち、自ら新聞を待っていたという。
そのせいで新聞配達の若い男とも一言二言、会話をしていた。
その時ばかりは、上機嫌で爽やかに挨拶を交わす。
どこから見ても、娘に暴行を加えるようには見えなかった。
「・・・父さんにとって、これはどんな意味のある行為なのかしら」
光里の眉間には皺が寄せられていた。
確かに、自分を手で受け取ることには全く利益を感じない。
だが、彼女は父親に残された唯一人間的な習慣を、
まるで宝石を見るような愛しい目をして語っていた。
僕にはその彼女の行動が全く解せなかった。

彼女の重いとは裏腹に、父親の光里に対する暴力は日に日に強くなっているようで、
夜中に僕の家に来ることも珍しくなかった。
一時的に僕の家に逃げてくることはあっても、次の日には父親の待つ家へ帰る。
彼女の変わりに奴を殴り飛ばしてやりたい・・・。
僕のその思いは徐々に強くなっていった。

4

「光里・・・温かいものでも飲みなよ」
僕は色あせてしまった瞳に話しかけた。
光里の前に紅茶を差し出すが、彼女は特に何の反応もなくそれを受け取る。
ポカンとあいてしまった心が目にも表れているようで、
黒々とした視線が紅茶に注がれる。
絶え間なく湯気をはき続ける紅茶に罪はないのだが、
なぜか光里の心を盗られてしまったような気がした。

二日間、彼女がここに着てから僕は家の外へ出ていない。
もちろん、光里本人もそうである。
少しでも離れれば、いつの間にか消えてなくなってしまいそうで不安だった。
光里はまだ紅茶に目を落とし、僕の方を向こうとしなかった。
彼女の顔の前で揺れる髪の毛を見ながら考える。

『ここにいていいから』
二日前に僕が彼女に言った言葉である。
その時、光里はまだ笑顔を見せていた。
それがどうして、今は言葉さえ吐かない。
やはり、彼女の中で父の存在は大きかったのだろう。
『殺される』
本能的にそう感じ、
生きる者として備わっていた守備的な何かを作動させてしまったのかもしれない。

とっさに出た本能が、最愛の父を殺した。
そして理性を取り戻してみると・・・そこには後悔しかない。
あくまで僕の推測だが、こう考えるのが普通だと思う。

音を発しながら、少しずつ紅茶を口に運ぶ光里。
それを横目で見ながら、光里の恋人として思う。
『もう一度、彼女の笑った顔が見たい』
よく聞く言葉でもあるが、それが僕の中にも芽生えるとは思わなかった。
必然的な感情なのだと悟る。

その時、玄関からインターホンが鳴り響いた。
光里は驚いて思わず紅茶の入ったカップを投げ出す。
やっと、人間らしい行動を見れた。
「光里！」
玄関に行こうとしている自分の足を一回転させて、光里に駆け寄る。
「大丈夫か？火傷してないか？」
申し訳なさそうな顔を見せるものの、依然として声は聞けなかった。
カップは割れなかったが、紅茶が弱い湯気を発生させながら床に広がってゆく。
光里の切なそうな顔が瞳に映る。

ピンポーン、と家の中で起きている事も知らずに誰かがベルを鳴らす。
タオルを棚から引っ張り出して、紅茶が拡散していく床に投げた。
「うるさい！今行くよ！」
思わず叫んでしまう。
床に放ったタオルが、紅茶を吸い込んで茶色く染まっていくのが目の隅に見えた。

光里はベッドに座り、俯いている。
「・・・はい」
僕はドアを開けて前を見る。
ロングコートを着た男が、白い息を吐きながら立っている。
「警察です」
そう言うと、マニュアル通りに手帳を見せる。
生唾を、飲み込む。
どうして彼女がここにいることが分かったんだ？
「河村光里さん、という方をご存知ですか？」
男はあくまで丁寧な口調で聞いてきた。
その間も、僕の頭の中で様々な思考が飛び交う。

知らないことにしようか。
それとも全部話して自首させてしまおうか。
彼女の父にも非はある。
もしかしたら、軽い刑で済むかもしれない。
震えそうな唇を噛み締めて口を開いた。
「・・・はい」
「あたなは、斉藤瑞哉さんですね。署までご同行願えますか」
呼吸が一度だけ止まった。
もう一度・・・。
「斉藤さん、ご同行願います」
男は僕の顔を見て、口調を強めた。

僕は

殺していない。

5

「光里なら、奥にいます。僕を連れて行っても意味がないでしょう」
僕は何を言ってるんだ。
何故、光里をたてに自分をかばっているんだ。

「二人の関係を聞けば、悪いのは父親の方だと分か…」
「斉藤さん」
男の声が、僕の声を遮った。
彼の表情に気圧され、言葉も自然と止まる。
「光里さんを殺したのは、貴方自身でしょう」

男の口元だけを見ていた。
頭で考えるよりも先に、体が動く。
倒れそうになりながら、
壁にぶつかりそうになりながらも部屋へ続くほんの短い廊下を走る。
「光里！光里！！」
部屋の中に駆け込む。
一コマずつ現実が瞳に飛び込んだ。
暖かい空気。いつも通りの僕の部屋。
そして、窓から覗く曇り空…。
「光里…？」
光里はいなかった。
さっきまで彼女が座っていたベッドには、誰もいない。
テーブルには紅茶を入れた二つカップが静かに立ちすくみ、
床に投げ出したタオルは乾いたままだ。

「光里…光里！」

僕は…僕が…

目に映るもの全て、どこかへ消えていくようだ。

何も、見えない。

僕が光里の父親を…光里を殺したのか。

何か言っている。何か…。

「父親の方は、新聞配達の若者が第一発見者でした」

そうか…光里がいつか笑顔で話していた。

それが彼の日課なのだと。

「光里さんは、ゴミ置き場を掃除しようとした主婦によって…」

もういい、もういいよ。

止めてくれ。

どうせ僕が悪いのだろう。

止めてくれ…。

6

あの日、僕は心配だった。
僕が犯行を起こす前日、
光里は父親の持っていた包丁を見て僕の家へと逃げ込んできた。
『殺される』。
そう思ったに違いない。
「まさか…私を殺そうと？」
光里は肩で息をしながら、今にも泣き出しそうな顔をして言った。
なぐさめて、否定してやりたい。
だが、素直に否定しきれない思いがあった。

そして、運命を変えてしまうあの日。
空はきれいに晴れ渡っていた。
光里は僕の家から直接仕事場へ向かった。
しかし、僕は心配でいても立ってもいられなかった。
光里があの家へ帰ったら、今度こそ父親に…。
嫌な不安だけが僕を包み込んでいた。
その『不安』は、彼女の死をあらわすものではなく、
自分自身の運命を変えてしまうものだとは知らずに…。

その不安に背中を押され、本能的に光里の家へと向かった。
考える暇もなく、勝手に足が動き出していた。
「光里…？」
ドアを開けて名前を呼んでみる。
丁度、仕事から帰る頃を狙ったはずなのだが、彼女はいなかった。
その代わり、光里の父親がそこにいた。

「何だ、光里の男か」
虚ろな目をした男が、不安な足取りで僕に近づいてくる。
物凄い酒の匂いが嗅覚を奪った。
この男が光里を・・・。
そう考えている内に、怒りが込み上げてきていた。
今まで苦しんできた光里の姿が目に浮かぶ。

何かぼそぼそと呟いている彼の全身を見回した。
ここで僕が怒っても仕方がない。
全ては光里の石が一番大切。
そう理解していたはずだった。
しかし、彼の手の中にある古びた包丁を見た途端、
僕の血は全て脳へと送り込まれていくようだった。
「それで光里を殺すのか…」
我を忘れたボKは、彼の返答を待つ間もなく、飛びかかっていた。
断片的な映像が瞳に送り込まれる。
彼が無造作に握っていた包丁が、何故か僕の手の中にある。
気付いた時にはもう、遅かった。
倒れた彼の体中から、赤い体液が次々と溢れ出し、
酒の匂いと混ざって尋常ではないものとなる。
流れていく血液を、頭を空にして眺めていた。
こんな汚い男から流れる血でも、真っ赤で綺麗に見えるものなのか
…。

これからどうしよう、と思った瞬間、
僕の隣には仕事から帰った光里が立っていた。

――――そうして、僕は彼女をもこの手にかけた。

「あなたは恋人を殺してしまったショックから、
この悲惨な出来事を一時的に忘れてしまったのです」

――――彼女がそう望んだのか、父を殺した僕を批難したのか。

「いわば、精神混乱状態だったのです」

――――僕はもう、覚えていない。

「彼女の幻覚を見ていたのですよ。
さて、光里さんを殺したのは覚えていますか？」

———ああ、はっきりと覚えているよ。

「瑞哉さん、聞いていますか？」

彼女は僕の手を握って、自分で自分を解放したんだ。
君が好きだった父と同じもので、同じ僕から。
最後に見た、光里の顔は笑っていた。

———そう、笑っていたんだ。

「瑞哉さん」

「…光里、笑っていた」
「それはどうしてですか？」

「僕と…そして父を愛していたから」

幻覚から覚めた僕は、後悔するものだと思っていた。
しかし、彼女を幸せに導いたのだ。
彼女の望みを叶えるために、僕はそのリスクを全て負うことになる。
それでも、彼女の最後の表情は僕に様々な感情を与えてくれたから
…。

空が曇っている。
あの日と同じ、晴れ渡った雲はもう現れない。

現れるとしたら、それはきっと僕が現実から解放される、その日だろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2819i/

現実変化

2010年10月28日02時41分発行